

From Ibigawa S A B O

梅雨が開ける気配を待ちきれずに、夏の暑さが徐々に増してきたこの頃。越美山系砂防事務所では、今年度の工事が各箇所まで進捗している中、今後の円滑な事業の推進に向けて、地元市町との事業調整会議を行いました。

地元市町と意見交換

円滑な事業の推進には、地元市町のご協力が不可欠です。管内の砂防事業推進に向け、揖斐川町（6月25日）及び本巣市（6月30日）と事業調整会議を開催しました。それぞれの会議には宗宮揖斐川町長、藤原本巣市長も出席され、今年度の事業内容や事業を進めるうえでの課題、地域の要望など活発な意見交換が行われ、情報の共有が図られました。例年、夏期は越美山系を含め、全国各地で土砂災害が多く発生しております。今後も連携を密にして、対応にあたっていきます。



揖斐川町との会議にて
宗宮町長のご挨拶



本巣市との会議にて
藤原市長のご挨拶

日頃の業務における研究成果を発表

中部地方整備局管内事業研究発表会が、7月2日及び3日に名古屋市の桜華会館にて開催されました。整備局管内の事務所・関係自治体が、事業執行の効率化につながる研究成果を共有する場として毎年開催されています。

当事務所からは村上技官が「既往の猛禽類調査を活用し、環境へ配慮した砂防事業へ貢献」という表題で主に6年間にわたる調査成果の整理・分析について発表を行いました。研究により得た知識を、今後の業務に生かしていきます。



発表を行う村上技官

クマタカ通信をメール配信します。配信希望の方は下記宛に「配信希望」とメールを送信して下さい。
また、クマタカ通信の感想やご意見もお待ちしています。

発行 国土交通省中部地方整備局
越美山系砂防事務所 揖斐川砂防出張所
〒501-0619 岐阜県揖斐郡揖斐川町三輪2303-3
Tel: 0585-22-3526 Fax: 0585-22-6626
E-mail: ibigawasabo@cbr.mlit.go.jp

順調に進むコンクリート打設 =岡谷=

本巣市根尾大河原（おおがわら）地先で土石流の捕捉を目的とした大河原岡谷（おかたに）第1砂防堰堤（H=12.5m）、出水時に川岸や川底などが水の力で削られないう流れの勢いを弱め、下流に安全に流す溪流保全工（L=100m）の建設工事を行っています。

今回の工事は主堰堤、垂直壁、流木止工、床固工、護岸工、橋台工など、広範囲で多工種の工事を、所組が行います。



コンクリート打設(床固工)

完成に向けて工事始まる =地谷=

揖斐川町坂内坂本（さかうちさかもと）地先で土石流の捕捉を目的とした地谷第2砂防堰堤（H=14.5m）を建設する最終工事が始まりました。

工事現場下流の高台には工事の進捗を見学できる展望台が設置されています。

今年度は主堰堤・水叩のコンクリートの打設、流木対策施設の設置および付属施設の設置を行います。工事完成を目指し、西建産業株式が工事を行います。



地谷第2砂防堰堤

小さな居候が育児に奮闘中です

事務所の軒先に、いつの間にか、ツバメが巣を作って子育てをしています。親ツバメが餌をとっては巣に帰り、その度に雛が嬉しそうに鳴くのを繰り返しています。

ツバメは古来、穀物を食べず害虫を食べる益鳥として、特に農村で大切に扱われてきました。

雛は通常3週間程度で巣立ちますが、天敵や、巣から落下する危険もあり、自然は厳しいものです。

無事に巣立ちを迎える事を祈りつつ、ツバメの育児をみんなで見守っています。



元気に食事を待っています♪

昭和40年(1965)災害／『奥越豪雨』⑨

岐阜日日新聞《現：岐阜新聞》による被害ドキュメント《前号のつぎ》

●9月16日夕刊 —— 営林署職員など7人は無事

16日正午、県災害対策本部に入った連絡によると、15日夕刻から孤立し、消息不明となっていた能郷の一家3人と、大河原営林署《統廃合により閉鎖》の職員4人は無事であることが確認された。

●9月16日夕刊 —— 飯場の18人無事

16日午前、岐阜県警本部に入った連絡によると、15日夕刻から孤立し、安否が気づかわれていた能郷集落から4km奥にある大成林産の飯場の労働者18人も、16日午前8時20分北方署の救助隊が発見し、能郷集落に收容した。全員が激しい疲労で、特に川崎美代子さん(40)が病気でかなり衰弱しており、同村診療所で手当を受けている。

一行の話では14日夜、急に川の水カサが増えた。危険だと思い子供2人を背負って、暗闇、豪雨の中を近くの小屋に避難した。夜が明けてみると住宅は流されており、何も無かった。ともかく安全な下流まで出ようと、全員飲まず食わずで歩き続けていたという。

●9月17日朝刊 —— 物資つぎつぎ空輸

16日夕刻、根尾村役場から県災害対策本部に対し、西谷の奥地にある大河原、越波集落で食料品が無くなったので救援して欲しいとの要請があった。このため自衛隊のヘリコプター2機を同地区に差し向け、大河原には白米600kg、越波には同900kg、それに調味料、食用油を添えて空輸する事になった。

●9月17日夕刊 —— 越波に電話開通

孤立状態の越波に17日午前9時5分ごろ、3日ぶりに電話が開通し、奥地の被害状況がわかってきた。越波集落には現在100人の村民と70人の労働者がいるが、いずれも食料がなく、米、ミルク、味噌など必需品の救援を待っている。この雨でヘリコプターからの救援が不可能なため、黒津から車で行ける所まで行き、あとは徒歩で運ばれている。

大河原集落は依然として通信、電気とも復旧の見通しは立っていない。この日、本巣県事務所に郡内の各町村や一般の人から米、衣類などの救援物資が届けられ、被災地へ運んでいる。

集中豪雨から半月後の報道

●10月2日朝刊 —— 応急工事に汗流す、砂防までは手が回らぬ

〈道路被害が甚大〉

人家の被害は最小限に止まった根尾村《現本巣市》も道路被害は大きい。揖斐川上流の白谷から大井、能郷、黒津谷に沿った県・村道の被害は甚大である。

特に大井から上流の県道は、徳山村《現揖斐川町》へのノド首に当たるだけに痛手である。この大門橋は昭和7年完工の古いコンクリート橋だが、取り付け部分を残してすべて流れ落ちた。裏側の取り付けに小高い河川敷があって、墓地になっていたが、濁流に洗われ、埋めてあった柩が流れていったのを目撃した人がいる。白骨はもちろん、白いカタビラも濁流に漂っていた。農家の牛も溺れながら流れていったという。

大門橋に平行して仮橋が建設され、ようやく通行できるようになったが、約6km上流の白谷が大荒れ、さらに揖斐郡境の馬坂峠までは、崩れていない箇所の方が少ないくらいで、この県道・今立本巣北方線《現岐阜県道270号 藤橋根尾線》はズタズタという以外に表現はない。

〈山もろとも崩れる〉

白谷付近は山ごと、ごっそりと削り取られた。標高約600mもある山頂付近から白谷橋まで、白い岩肌をさらけ出している。雑木林ではあるが、これだけ山が崩れるという事は、昔話にも聞いた事がないという。

土砂に巨岩が入り混じって、搬出するどころの騒ぎではない。そのまま松の巨木を積み重ね、土砂を置くといった応急工事だが、それでも半月はかかる大工事である。一面、土砂の原っぱが出来上がったが、このまま放置すれば、雨が降るたびに流れ出し、いずれは本流も埋めてしまいそうな状況だ。県道開通が当面の目標で、砂防までは考えが及ばないといった状況である。

<つづく>



←
「川原地区」
河川氾濫の
応急工事

出典：越美山系災害史（原文）

《 》はクマタカ通信転載にあたっての補足箇所
発行：越美山系砂防工事事務所 平成10年10月